

【紹介】青木馨著

『本願寺教団展開の基礎的研究―戦国期から近世へ―』

〔法藏館・二〇一八年三月二五日刊 本文四三五頁 九、八〇〇円〕

蒲池 勢 至

青木馨氏が、長年続けてこられた研究の成果をまとめて大著を刊行された。三五年近く傍らにあって同氏の研究を見続け、また一緒に全国各地の真宗寺院調査を行ってきた評者にとっても喜ばしいことである。この著書の紹介をすることともに、いささかの感想を述べてみたい。まず、通例に従って目次を掲げると次のとおりである。各章が一つひとつの論考であるが、その下に付せられた節・項は割愛した。是非とも本書を手にとって確認せられたい。

序論―研究史と課題

第I編 三河における地域道場から教団への展開

第一章 三河の初期真宗概観

第二章 文明十六年『如光弟子帳』

第三章 本宗寺の成立と展開

第四章 本願寺教団の形成

補論「御文」本流布の実態

第Ⅱ編 本願寺門主制と近世の末寺身分

第一章 本願寺門主制の性格

第二章 戦国期門主とその一族―装束に見る―

第三章 近世「似影」に見る住職家の成立と格付

補論 願力寺所蔵史料『余間昇進記録』

第Ⅲ編 本願寺下付物と墨書名号

第一章 戦国期本尊・影像論

第二章 墨書名号の考察

補論 墨書幼児名号について

総論 由緒・伝承の成立

結語

著者の問題関心と課題は、序論で自ら語っているように「蓮如期に真宗門徒が急拡大し、名実ともに本願寺教団が形成されるに際して、その基底をなした在地道場の生成を基本的視点として、これらの道場が近世的寺院へと成長し、教団的身分を獲得してゆく様相を考察する」(三頁) ことにある。「在地道場の生成を基本的視点として」というのは、三河の真宗教団がどのように成立したのか具体的様相を明らかにすることであった。

第一編で著者は、上宮寺蔵の文明十六年『如光弟子帳』と「天正十九年末寺帳」に記載された在地道場を、本山から下付された絵像本尊の裏書と対照させていく。また、本證寺・勝鬘寺・淨妙寺などともに道場分布を地図上に落として、三河三箇寺の展開とその違いを明示する。ここから、蓮如下付の道場本尊は少なく実如期の下付が多いこと、『如光弟子帳』に一部「手次」「末」「直」と記載があるように、上宮寺には本願寺帰参以前から基礎的な本末関係が成立していたとする。「天正十九年末寺帳」の段階になると一段と本願寺教団に取り込まれ、中本山上宮寺に末寺や道場が直接的支配される形態になったという。また、天正十九年の末寺帳と並行して作成された御堂番を記す『上宮寺々法』から、「下坊主衆は、単一的性格の「上宮寺末」道場であり、中央本願寺を「門跡」として頂点に戴きつつ、地方本山たる上宮寺をも「御ゑんげ様」と呼称して本願寺と同様な權威的地方家元的存在とする従属関係の形成を見る。ここに幕藩制国家支配体制に先立つ新たな教団的「統一」意識のもとに、近世教団の創出を見出すことができるのである。」(五六頁)と結論した。

一方、上宮寺をはじめ本證寺・勝鬘寺の三河三箇寺が在地に展開しているのに、なぜ本宗寺や別坊驚塚坊が建てられたのかと疑問を提示する。そして、本宗寺は三河の大坊主傘下の門末形成が進展する中に、地方における本山

直属の血族寺院として門末総与力の寺院として建立されたと述べる。この「第三章 本宗寺の成立と展開」「第四章 本願寺教団の形成」では、土呂坊本宗寺と別坊鷲塚坊は二坊一体で、さらに実円が兼任した播州英賀本徳寺とも一体であったことが論及されている。その背景には上宮寺門徒が伊勢射和や奈良吉野へも展開していた事実があったと着目し、上宮寺門徒は「矢作川と三河湾を中心に典型的な、「川・海型」の門徒集団」であったと述べる。このネットワークの上に、本宗寺は伊勢湾を越えて英賀本徳寺と一体化する基盤ができたのだという。この第I編は、著者が学生時代から歩いて収集してきた絵像本尊や影像類の裏書を、圧倒されるほどの点数でもって提示し、論述の基本的史料になっている。

第II編では、一転して本願寺教団における装束衣体と身分昇進の論になる。蓮如以降、証如・顕如期に本願寺内の身分体系が宗主（門主）へ一元化されていく。門主の権能として下付・授与権、儀式主宰権、相伝権を取り上げた後、影像類に描かれた戦国期門主とその一族の装束を詳細に分析する。衣体に関する歴史的研究は少なく、装束の変化を通して身分制と門主の権能を考察したのは本書の一つの特徴であろう。蓮如はうす墨（ネスミ色）の衣を唯一の着衣としていたが、実如期になると「本寺の前住上人影像の衣が僧綱襟の衣に五条袈裟（檜扇所持）着用となり、末寺では証如期の実如影像（前住）に同趣のものや鶴丸紋入りのものが見られるようになる。」（二〇二頁）「蓮如までが無地の僧綱襟の衣に白色五条系袈裟に檜扇であり、実如は鶴丸紋に同紋五条袈裟に檜扇、証如・顕如が八藤紋に同紋五条袈裟に檜扇所持というものである。」（二〇三頁）と指摘する。鶴丸紋は日野流、藤紋は藤原流の由来を表していて、証如期に装束の貴族化が見られるという。僧綱襟を立てた紋衣の形態である「袈帯」は、顕

如の門跡成以降、門末に下付される影像に見られ、權威の象徴として普及した。「紋の使用は「家」の表現とともに門閥化・貴族化の表れといえるが、蓮如・実如期影像上はそれを見出しえない。しかし、証如・顕如期以降は門主のみならず一家衆などの一族にもそれらが見られるようになる。これは蓮如が親鸞を權威化したことに對して、歴代門主を權威化していくことへの変貌と考えられる。」(二二三頁)と述べる。

こうした分析対象の装束衣体については、教団外の者はもちろん、教団内にあっても関心のあるものしか分からず、理解し難いのではないかと思われる。しかし、それでもここに論じられているのは、著者が早くから関心を持っていたことによる。そして、もっとも主張しなかったことは、「家柄」と「身分」という概念によって、本願寺一族の「家」について「法名・諱の「御字」、巡讀などの役割や座次、衣や紋などが、「家」としての永続的認可と個人的非永続的認可とに大別される。そしてこれら許認可の全ての権能は、親鸞・蓮如直系の本家たる本願寺門主が独占し、血の論理を中核とした家元的存在として機能する点その特色を見る。」(二二七頁)ということである。そして、こうした家元としての門主体制は、地方寺院に下付される歴代門主影像や、地方寺院の住職家に下付された「似影」を通して、本願寺の家元的性格と門末の身分的序列を貫徹させたのであった。

第三編の「本願寺下付物と墨書名号」は、戦国期本尊・影像論や開山親鸞御影についても述べるが、中心は蓮如が門徒や坊主に下付したとされる草書体・楷書体六字名号についてである。多く場合、すべてが蓮如筆と伝承されたりしてきたが、筆跡の特徴から蓮如・実如・証如・顕如・教如の名号を判別する基準を提示している。著者が名号の筆跡論として「本願寺蓮如・実如筆名号比較試論」(『佛教史学研究』三七―二、一九九四)を最初に出された

後、同朋大学仏教文化研究所では調査して撮影していた名号をすべて検出して分類し、著者の名号筆跡の分類案をサポートした。その成果が『蓮如名号の研究』であり、本書の論考となった。夜遅くまで大量の名号写真とデータの整理に没頭したことが思い出される。筆跡の分類については、いまここでは煩瑣になるので略すが本文を参照されたい。それまで真宗史の大家が調査経験と見識から判定していた墨書名号に、著者が一定の判定基準を出したことは大きな功績である。しかし、それでもまだ判定できない名号が多くあるのも事実であり、依然として伝承の世界にある。

さて、第Ⅰ編・Ⅱ編・Ⅲ編と内容を紹介してきた。この後に「総論 由緒・伝承の成立」が続いている。これは本書全体の構成でどんな位置付けになっているのだろうか。近世地方教団の寺院が身分を教団内に獲得していかうとするとき、由緒・伝承が生成されたという。この具体的様相を三河の願力寺の余間昇進や土呂・鷲塚・柳堂・如光伝承に見とり、法宝物と聖地が創出され、「近世中葉以降、あらためて由緒のある真宗の「寺院」が誕生した」(四頁)とする。由緒が身分獲得のとき必須で生成されたという事実は、これはこれで重要な指摘であった。しかし、全体の「総論」とするには物足りない感がする。「史実から伝承へ」という観点をキーワードにしたというが、いま一度、由緒・伝承まで含めた三河教団の近世的特質を論述して欲しかったと思う。伝承は本願寺周辺にも生成され、地方であっても土地と結び付いた伝承が生まれている。「伝承」は事実ではないが、偽作された事実をみるだけでなく、伝承でしか伝えられないもう一つの事実があるはずである。それはもう文献に基づく歴史の世界から離れことになるかもしれないが……。

いずれにしても、本書は著者が四〇年余りにわたる地道な研究成果である。裏書をはじめとする多くの史料収集と分析から生まれた、著者のライフワークであり研究成果である。三河真宗教団の成立について、ここまで論述されたことに敬意を表したい。それにしても、本書を読み終えた後、権威化と身分化、「家柄」と「身分」という本願寺教団と、門徒に対して平座で御同行・御同朋を説く教団との整合性はどこにあるのだろうか、と考えざるを得なかった。

終わりに蛇足ながらも一言記しておく。著者は「あとがき」で評者が「生きてきた証を残せ」と督促したように書いておられる。これは誤りで、私は「長年研究してきた自身の決着をつける」と申し上げたまでである。一冊の書物は、たしかに著者自身のものであるが、公刊されれば著者だけのものでなくなる。本書は、いろんな人によって読み継がれて行くであろう。